

測定室だより

No. 17

1992年10月23日

発行 放射能汚染食品測定室 代表藤田祐幸

¥300-

事務局 横浜市港北区日吉4-1-1 慶応義塾大学物理学教室 藤田祐幸 気付

電話 045-562-2279 (FAX兼用)

振替 東京9-118321 放射能汚染食品測定室

クリチェフ、チェチェルスク訪問 被害地域からみたチェルノブイリ

チェルノブイリに放射能測定器をおくる会 大東 断

昨年の夏、“おくる会”ではおおくの方々の募金で、チェルノブイリ原発事故の被災地域であるチェチェルスクに放射能測定器のシステム一式をおくった。この夏も、昨年に続きベラルーシに出かけた。目的は、①北部の汚染地域にあるモギリョフ州クリチェフに新たに測定器一式をおくること、②昨年おくれたチェチェルスクのアフターケアをすること、③今後の支援のためにスラブゴロド、クラスノポリエを訪問し調査すること、であった。訪問団のメンバーは7名—小泉好延、中地重晴、大東断、松岡信夫、菅井益郎のおくる会メンバーと、募金で協力いただいた新潟から矢代和克、花沢栄一が参加した。

7月27日に成田を出発。29日、クリチェフ着、8月1日までクリチェフに滞在、同日チェチェルスクに向かった。チェチェルスクは1日～7日の滞在、8日、モスクワ着、9日、モスクワ発、10日、帰国した。

この間、7月31日にはスラブゴロド市訪問、8月4日チェルノブイリ事故炉訪問（5名）、8月6日、クラスノポリエを訪問した。（大東、松岡、花沢は8月4日チェチェルスクをたち6日に帰国した。）

募金に協力いただいた方々に深く感謝するとともに訪問の報告をしたいと思います。

クリチョフ市はチェルノブイリから北北西におよそ270キロ離れ、ベラルーシの汚染地域の北西端に位置し、ロシアに隣接する地域である。市長さんの説明では、クリチョフ地区は人口46,000人、1,000平方キロ、113の村が点在する。

市の産業の中心はもうもうと白煙をあげるセメント工場で年産136.5万トン、2000人が働いているという。他にゴム製品工場、建設コンビナート、食肉加工工場、牛乳加工工場、製パン工場などをもつ工業都市で

ある。

クリチェフ地区の汚染

汚染地図でみると市中心部は汚染地域から逃れているが、高汚染地域は間近に迫っている。市長さんの説明では、地区の半分が汚染されている。1～5キュリーゾーンに28村、5～10キュリーゾーンに20の村がある。15キュリーゾーンには森はあるが、村はない。移住希望者の20家族がすでにウクライナやロシアに移住済みで、逆にチェリコフ、スラブゴロド、クラスノポリエなどから54家族が移住してきているという。

汚染は比較的軽いが、そのためにゴメリやチェチェリスクなど高汚染地域で外国からの援助がつきつきと入り、またミンスクからも優先的に援助が与えられたのに比べ、逆に、この地区はそうした援助から置き去りにされてしまった地区だ。

保健局に測定器など一式を

私たちが持って行った機器はすべて保健局におくられた。食品用のNaIシンチレーション測定器一式と携帯用のNaI測定器5台を中心に、説明用ビデオテープを写すためのビデオ・テレビやデータ整理のためのコピー機などの周辺機器などである。

保健局は市長舎からはなれた独立した2階建ての建物で、ビデオをセットした部屋、食品用の測定器をセットした部屋の他にも、各種の化学分析装置を置いて作業している2部屋続きの部屋などを持っていた。

86年の事故直後から空間線量の測定をは

じめ、食品の測定についても相当な量のデータが蓄積されている。今も食品の汚染とバックグラウンドの測定を行っている。保健局では食品用の測定器として3台目を使っていた。1台目は旧式のガイガーカウンターに遮蔽を施したもの。2台目はNaIだが小さなもの。3台目が比較的新しく、ちょうど私たちがおくれたものに相当するレベルの測定器になっていた。古い2台はすでに使われなくなったものの大事に保管されていた。

小泉さんが装置の使い方などの指導にあたったが、担当職員の女性達のみ込みははやく、すぐに使い方は覚えてくれた。この保健局での地道な放射能測定に、私たちがおくれた測定機器は十分に役立ってくれるだろうと思う。

(以上、大東)

チェチェリスク再訪

中地 重晴(環境監視研究所)

チェチェリスク地区には土曜の夕方に到着しました。昨年世話になった保健局長のセカチさんとチェルノブイリ担当副市長のオルロフさんが出迎えてくれました。

市長との会談

8月3日、まず、チェチェリスクの市長室でザレッキー市長はじめ、保健局のメンバーと話し合いました。小泉さんのほうから、昨年訪れた際に、食品のサンプルを持ち帰って精密検査をした結果や、夏休みに子供たちが日本にきたときに測定した体内のセシウム量

について報告しました。

続いて、市長の方から最近行なっている汚染対策について説明を受けました。まず、道路の除染作業を行なっているとのこと。具体的には道路をアスファルトで舗装したり、また放射能で汚染された土ほこりが舞い上がらないように散水しているとのこと。去年は全然気がつかないのですが、今年は町中で大きなタンクを積んだトラックが水を撒いているところに何度も出会いました。

また、非汚染地帯などから、できるだけ汚染の少ない食糧を供給するようにしているとのこと。そのためかはわかりませんが、最近ミンスクの研究機関（放射能影響研究所）がチェチェルスク地区に5カ所の支所を作り、食品の検査をはじめたようです。残念なことに今回は時間がなくて見学できませんでした。

さらに、コルホーズなどの農場で働く、農夫が汚染された土ほこりを吸わないように、農作業に使うコンバインにエアコンディショ

ナーをつけるように改造しているとのこと。今までに45%のコンバインにエアコンを付けたそうです。

昨年我々が指摘してきたベチカの灰による汚染については、非汚染地から木材を持って来るとか、石炭を使用しているとのこと。また、ベチカを使わないようにガスに切り換えようということで、ガス管の敷設工事を行なっているとのこと。町の中心部は完了したようですが、国道から引き込むための約6kmができていないので、まだガスは来ていないとの説明でした。

保健局で

今回の訪問の目的の一つは、昨年おくれた測定器がうまく使われているか、故障していないかどうかを確かめることです。

幸い携帯型の「たんぼぼ」は、担当者のターニャさんが毎月学校などいろんな所を詳細に測定してきたようで、ぎっしりとデータを



クリチェフの保健局で、食品用放射能測定器をセット

書き込んだ測定結果を記入したノートを見せてくれました。

食品測定器の方は、担当者が昨年使い方を教えたスタッフとかかわっていました。昨年のメンバーからはイリーナさんが残っていただけで、責任者をはじめ、3人が我々にとっては新顔でした。我々が昨年おくれた測定器は、残念なことに担当者が代わってしまったこともあり、使用頻度が少ないようでした。念のために、新しい担当者に使い方を説明し、測定した結果を記入してくれるように再度頼んできました。

体内のセシウム測定について

驚かされたことの一つには、昨年、小泉さんと河野さんが非常に苦勞をして60人ぐらゐの人の体内のセシウム量を測定したわけですが、なんと病院で89年から体内のセシウム量を測定しているとのことでした。今回はその装置も見せてもらいました。約5分椅子に腰掛けている間に体内のセシウムを測定するようになっていて、ある基準値（大人の場合1マイクロキュリー）を越えた人を管理するために使っているようです。

昨年、我々が苦勞して測定しているときになぜ教えてくれなかったのかと尋ねると、こちらから聞かなかつたので答えなかつたとの返答。連帯基金のメンバーも何度も病院を見学しているにも関わらず、誰も気づかなかつたとは本当に不思議な話です。

お別れのパーティー

今回欲張ったスケジュールで時間がとれな

かつたのですが、昨年、今年と世話になった保健局の関係スタッフを、お礼の昼食会に招きました。時間もなかつたのですが、例によってロシア民謡の大合唱で楽しい一時を過ごすことができました。

スラブゴロド市訪問

松岡信夫

スラブゴロド市はクリチェフ市の西南約60キロ、モギリョフ州の最南部に位置している。ベラルーシの中では、プラーギン、ホイニキ両市について、放射能汚染のひどい所といわれる。

スラブゴロド地区ソビエト議長、同市長はじめ幹部らの説明を要約すると――

地区の人口は23,000人、そのうち市内居住者は8,500人。主な産業は農業。放射能汚染の平均値は11.2Ci/km²だが、地区の3分の1面積で15Ci/km²を超えている。いくつかの村では40Ci/km²を上回ったが、そこはすでに住民が移住した。ホットポットに接している地域の住民に移住を勧告したが、住んでいる土地への執着が強く、移住を拒否している人たちがいる。

これまで実施した汚染対策としては、①高汚染地域の表土の入れ替え、②道路のアスファルト化と散水などがある。内部被曝対策としては、飲料の検査とコントロールが必要だが、この地区には恒常的な食品の検査体制がない。（この点で、日本からの協力を要請された）。

スラブゴロド市での話し合いの中で感動したのは、チェルノブイリ原発事故後の86年5月、市の衛生局の職員たちがDP-5という軍用測定器2台を使って、手作りの放射能汚染地図を作っていたことだ。測定値を記した細かい紙を何重にも張り込んだ地図を見せてもらった。「測定の精度は高くありません。それに町村の居住地を測っただけで、林や農地までは手が回りませんでした」と言っていたが、現場の人たちが最大限の努力を払った跡がうかがえた。

住民の健康への影響が気になった。最近3年間で6人に甲状腺ガンが生じた。22年間この地区で働いてきた医師によると、この病気はチェルノブイリ原発事故前は、1件もなかったという。胃腸病、精神的な障害が多発するようになった。従来の方法では診断のつきにくい病気も見られる。傷の治療にも、以前より長い時間を要している。貧血症も増えている。

動植物に異常は見られないかとの質問に対して、クリの葉が64センチぐらいに肥大した（ふつうは15センチ）、コガネムシの幼虫で体長7センチ（ふつうは1.5センチ）のものが発見されたと、との回答があった。

最後に市長から以下のような日本側への協力要望事項が出された。

- ①食品汚染測定装置を含む放射能測定器
 - ②血液検査用具
 - ③使い捨て注射器、同輸血用具
 - ④血液病の子どもたちの診断、治療。
- その他。

モギリョフ州のクラスノボーリエ

小泉好延

クラスノボーリエは交通幹線からはずれ、支援の遅れが予想されるため、今回の計画でも重視した地区である。チェチェルスクの保健局と交流があり、支援を行ってほしいとの要請があった。今年の5月、チェチェルスクを訪問した連帯基金の大友さんにも訪ねていただいた。

ベラルーシ共和国の北東部汚染ゾーンの最も東にあり、チェルノブイリ原発より約250km離れている。モギリョフ州に属しているが、チェチェルスク地区とは隣り合わせになっている。人口は約15,000人、中心地域は畑作と酪農が行われているが、周辺地域は全て森林といってよいほど、森の多いところである。中心地域の汚染はセシウム137で、2~5Ci/km²あるが、周辺の森は全て高い濃度の汚染に見舞われている。即時移住レベルである40Ci/km²を越える地域が東西南北、全ての方角にある。地区の境にある森を通過していたとき、車内の携帯型測定器が狂ったように上昇をはじめた。暗算したところ120Ci/km²の汚染を示していた。周辺を大変な汚染に見舞われ、中心地域だけが、かろうじて島のように残ったといった状態である。

熱心な保健局と診療所

保健局長、ゴロバーエフ・エフゲニーさん、診療所長、ピニコフスキー・ビクトリアさんの二人が待っていた。保健局長さんは27才

とたいへん若く、大学院生といった雰囲気をもった人である。診療所長さんは35才程、がっしりとした体格で仕事の鬼とでもいうか、エネルギーな人という印象を受けた。

早速、携帯型の測定器を一台贈り、現状を聞いた。とにかくすごい話し方である。初対面の挨拶が終わらない内に、まずこの地域の状況を聞いてくれ。国際原子力機関のIAEAが来たが、彼らは大したことはない、大丈夫などと言って帰っていった、実にけしからん、とんでもないではじまり、それから汚染や被曝の状況を次から次へと話始める。その話が終わるのが待ちきれずに、診療所長さんが医療の現状を話し始めるのだから、初対面から喧嘩しているかと誤解されるような雰囲気である。チェチェルスクから同行してきたセカチさんは目を丸くして驚いている。

いきなり本論に入る飾り気のない歓迎は、私たちが望むところである。短い時間であったが、放射線検出装置を前にして内容のある議論が出来た。ここでも食品検査装置が全く不足している。

マイクロ・コンピュータによるデータの把握

地区の汚染状況や食品検査データは自力で入手したマイクロ・コンピュータに入力され、鮮やかに整理されていた。これまで各地を廻ってみて、強く感じたのは、地域のデータが地元で整理されていないこと、中央へ送られているが整理結果が戻っていないことである。地域のデータは地元の人の手によって、整理されてこそ、汚染や被曝防護へ活用出来るのではないだろうか。私たちの支援でも、デー

タの整理と活用への協力、具体的にはマイクロ・コンピュータと整理プログラム、コピーなどの支援、協力をはじめている。この地域では不十分であっても、自らの手でデータを整理し、情報を把握していた。

現在の問題

診療所の内部被曝検査装置を見学した後、食事をしながら、再度現状を細かに聞いた。その内容は次のようである。

1. 子供の80%に甲状腺肥大がおこっている。
2. 今年、二人の子供の甲状腺手術を行った。
3. 肺ガンがふえそうな前兆がある。
4. 1平方キロメートル当たり、15キュリー以上の汚染地域では、免疫不全が上昇している。
5. トラクターを運転する農民の健康が心配である。
6. 事故直後、直ちに野外放射線量の測定をはじめた。今、そのデータに基づき、モスクワ大学の研究者と甲状腺の被曝線量の計算を行っている。近い内に論文となる。

時間があれば、彼らはもっともっと多くの問題を語りたかったにちがいない。

粗末な装置を使いながら、必死にがんばっている地域の担当者に会うことが出来たことは、大きな収穫であり、喜びである。近い内に再び訪問することを約束して車に乗った。

この地区を訪ねて、もう一つの収穫があった。地元のデータ整理が未だ行われていない、チェチェルスクのセカチさんに大変な刺激を与えたことである。彼は帰りの車の中で、コンピュータを使ってデータ整理をすすめると、盛んに強調していた。

事故の実態に迫る報告続々と

ミンスクでのチェルノブイリ事故影響に関するシンポジウム

渡辺美紀子（原子力資料情報室）

6月29日から7月1日までの3日間、ベラルーシの首都ミンスクで開催されたチェルノブイリの影響に関するシンポジウムに参加した。このシンポジウムはこれまでに何度もチェルノブイリ周辺地域を訪問している藤田祐幸さんが提案したもので、現地の救援組織の「ベラルーシ平和基金」の主催で開かれた。昨年IAEAが出した報告書に対して現地の科学者は厳しい批判をしたが、その内容は詳細には伝わってこない。今回のシンポジウムでは、現地の専門家がこれまで蓄積してきた内容を引き出し、事故の影響を明らかにし、また汚染地域の現場の医師や行政官と都市の専門家との交流をめざしていた。そして、日本からは広島・長崎の放射線被害の実態とその評価を正確に伝えることに主眼を置いた報告が準備された。

しかし、現地側の会議の準備状況やデータの公開性の面などで、イメージしていたものとはかなり違ったシンポジウムとなった。交通の便が悪い郊外で開催されたせいもあって、現地の人々の参加は少なかった。また、報告する人も、自分の報告が終るとすぐひき上げてしまう人が多く、シンポジウムを通して参加したのはほんのわずかだった。限られた範囲ではあったが、ベラルーシと日本の科学者の

間で活発な意見交換がなされたことは大きな収穫だった。

ベラルーシからの報告から、ベラルーシの各研究機関では、かなり精力的に詳細な研究がすすんでいることがわかった。とくに印象に残っている内容を紹介する。

事故当時のヨウ素131の汚染分布を再現しようという作業が進められていることが明らかになった。暫定的なヨウ素汚染地図（データのページで藤田祐幸氏が解説）ができていた。

土壌中のセシウム137、ストロンチウム90は、ともに17～23年間という長期間、地表0～5cmに集中してとどまる。セシウムについては、これまで考えられてきた以上に外部被曝の評価を厳しく再検討しなければならない。

また、ストロンチウム90は原発の近くに降下したものは粘土内に固定されて、不溶性で動きにくい。が、原発から250kmの遠い地点では酸やアルカリに溶けるかたちのももあり、農産物に入ってくる可能性も懸念される。場所によってはセシウムによる汚染よりもストロンチウムによる汚染のほうが大きな被曝となるケースも出てきそうである。

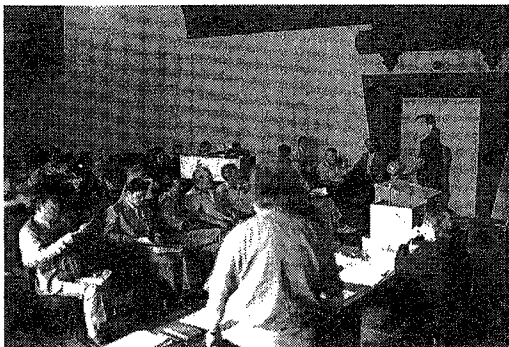
プルトニウムについてもたくさんのデータがあった。ふつうプルトニウム239とプルト

ニウム240だけが問題にされるが、プルトニウム238、プルトニウム241についても綿密な測定がなされていた。そして、今後プルトニウム241がベータ崩壊してできるアメリシウム241の危険性が大きな問題になること、とくにホットパーティクルのかたちで体内に入り込んだプルトニウム粒子からのアメリシウム241には要注意という指摘があった。

医学面では、免疫機能に関する研究で、ガン細胞のはたらきを抑制する免疫細胞の機能変化を経時的に追跡した報告があった。被曝直後は活発だった細胞のはたらきが、事故から6年たった現在、通常レベルより下がっているという。

日本側からは、長崎大学原研内科の貞森直樹氏は「原爆後障害と今後の身体的・遺伝的課題」、大阪の阪南中央病院の医師、村田三郎氏は「過小評価されてきた原爆災害」について報告。築城昭平氏は長崎原爆被爆者の立場からの訴えを行なった。また、原子力資料情報室の高木仁三郎は「電離放射線の発ガンリスク」について、これまでの放射線リスク評価の歴史を踏まえて報告した。

シンポジウムの最終日には、この3日間の内容を踏まえて共同声明（10ページに全文掲



シンポジウムでは活発な意見交換が

載)が採択された。その内容は低レベルの放射線被曝に対して厳しい立場をとり、核兵器の廃絶と原発およびすべての核燃料サイクル施設の廃棄をめざして努力するというすばらしいものとなった。また、今後、日本とベラルーシの間での科学者の交流が重要であることが確認された。

シンポジウムで藤田さんとともに共同議長をつとめたベラルーシ放射線生物学研究所長で最高会議の代議員でもあるE. F. コノプリャ氏は、この会議の総括のなかで、現在作成中のベラルーシ独自の、チェルノブイリの被害・障害を解決するためのプログラムの内容を語った。その基礎となっているのが、今回のシンポジウムの内容であるとのことだった。

●ベラルーシ独自のチェルノブイリ対策

放射線被曝はいかに低線量であっても人間にとって危険である。しかし、イリイン、イズラエリらは、年間5ミリシーベルト(0.5レム)が許容線量であると主張した。前の白ロシア政府はこの見解を支持し、生涯被曝線量は350ミリシーベルト(35レム)として国家プログラムが組まれた。われわれはこれに反対し、年間の個人被曝線量1ミリシーベルトがベラルーシ最高会議で採択された。しかし、実施が困難なため、1993年から4年間は3ミリシーベルト、97年は2ミリシーベルトと段階を経て、98年には内部被曝を含めて年間1ミリシーベルトの基準を達成させたいと述べた。

汚染地からの移住については、セシウム137

で40キュリー/km²以上は強制移住地域。15～40キュリー/km²も強制移住地域。ここには325の村があり、事故前には32万5,000人が住んでいたが、昨年までは避難権利地域であった。予定どおりには進んでいないが、今年中には避難を完了するという。

5～15キュリー/km²の地域では避難は個人の判断に委ねられている。避難する場合は、残った資産について補償を受けることができる。この地域でも土壤に浸透しやすく、移動が早い核種のせいで年間の被曝が5ミリシーベルトを上回ってしまうところもあるという。ブレスト州など一部では、6～7キュリー/km²で強制移住となっている例もあるようだ。

1～5キュリー/km²地域は常設モニタリング、コントロールゾーンと呼ばれている。この地域でも有病率は高く、対策として汚染されていない食品を買うための資金が支給されることになった。

強制移住させられた人の特権としては、全部捨てた場合、非汚染地区に無料で新しい一戸建ての家をもらえる。汚染地区に住み続けている人々への特権として、15～40キュリー/km²では月給が2倍、15キュリー/km²では1.5倍。さらに、非汚染食品を買うための資金が支給される。保養地利用は無料、病気のときの薬は無料、子どもたちに対する医療対策も無料で行なわれている。

除汚作業者については、原子炉ではたらいっていた人だけでなく、30kmゾーンに早期に入っていた人々も含んで、1986、87、88年に汚染地ではたらいいた滞在時間によって被曝者であるとした。所得税は免税、家賃、交通

費は無料となる。

ベラルーシ最高会議では、チェルノブイリ被害者のための社会的法律と汚染地帯基準の法律を採択し、汚染地区住民の特権を定めている。しかし、現在の経済状況はきわめて厳しく、この法律を守るのは容易ではない。1～5キュリー/km²ゾーンで短期間はたらいっていた除汚作業者への特権はしばらくの間停止されている。

90年度に実行された強制移住、医療などへの出費は170億ルーブルで、政府予算の約18%に相当している。92年現在ではほとんどの物価が2倍以上になっており、インフレ率も考慮にいれて予算化をはかる必要がある。資金には所得に対して18%の割合で課税されるチェルノブイリ税をあてるとのことだった。

シンポジウムが終ってからホイニキ、ヴェトカなど高汚染地帯をまわった。どこまでも続く地平線、自然が大きく広がり、大地にいちばん近いところで生きていた人々。原発の恩恵など受けずに、チェルノブイリとは遠いところで生きてきた人たちが、こんなにも大きな被害にさらされた。一基の原発事故がもたらした災害の大きさをあらためて実感した。

ミンスク国立ガンセンター、ゴメリ州立病院では、笹川財団から調査研究・治療という名目でやってきた医師や科学者たちからは何の報告もないままだという不満の声をいくつも聞いた。彼らはIAEAとつながるばかりで、現地の人々には何の貢献もしていない。旧態依然とした研究者もまだまだ多い。チェルノブイリの被害に心を寄せる人たちとしっかり手をむすんでいきたいと思う。

我々、ベラルーシ、日本国際会議（6月29日～7月2日、1992年ミンスク）の参加者、すなわち、放射線生態学、放射線生物学、放射化学、核物理学、医学、農学、放射線医学、経済学、社会学などの分野の専門家と学者およびさまざまな社会団体と市民運動の代表、チェルノブイリ事故と広島・長崎の原爆被害者は、放射線による生態学的、医学的、社会的、経済的被害の克服と被害者の補償をめざす対策をテーマに討論をした結果、つぎのことを強調する。

1. チェルノブイリと広島・長崎の被害は、その発生の原因と性格において、相違点は存在するが、放射線による生態学的、医学的被害に関する人間と環境に対する影響については共通点が多い。
2. 核による被害の評価において、人体に被害を与えないような放射線量を設定することは困難であるということを確認した。放射線の人体に対する影響についてはしきい値は存在しない。とくに低レベルの残留放射線による被曝の影響は、その危険性を危惧させるものである。それゆえに、これ以上の被曝を拡大させないすべての措置が必要である。また、いままでおよびされた被害の慎重な調査、理論的・実験的な研究が必要である。
3. ICRP（国際放射線防護委員会）が採用している電離放射線による発ガンおよびガン死亡のリスク評価は過小であり、被曝による実際の被害を反映していない。同時に被曝が健康状態を悪化させ、人間の寿命を短縮させる身体的影響も考慮されていない。したが

って、すべての疾病に関するリスク評価を見直すことを要求する。

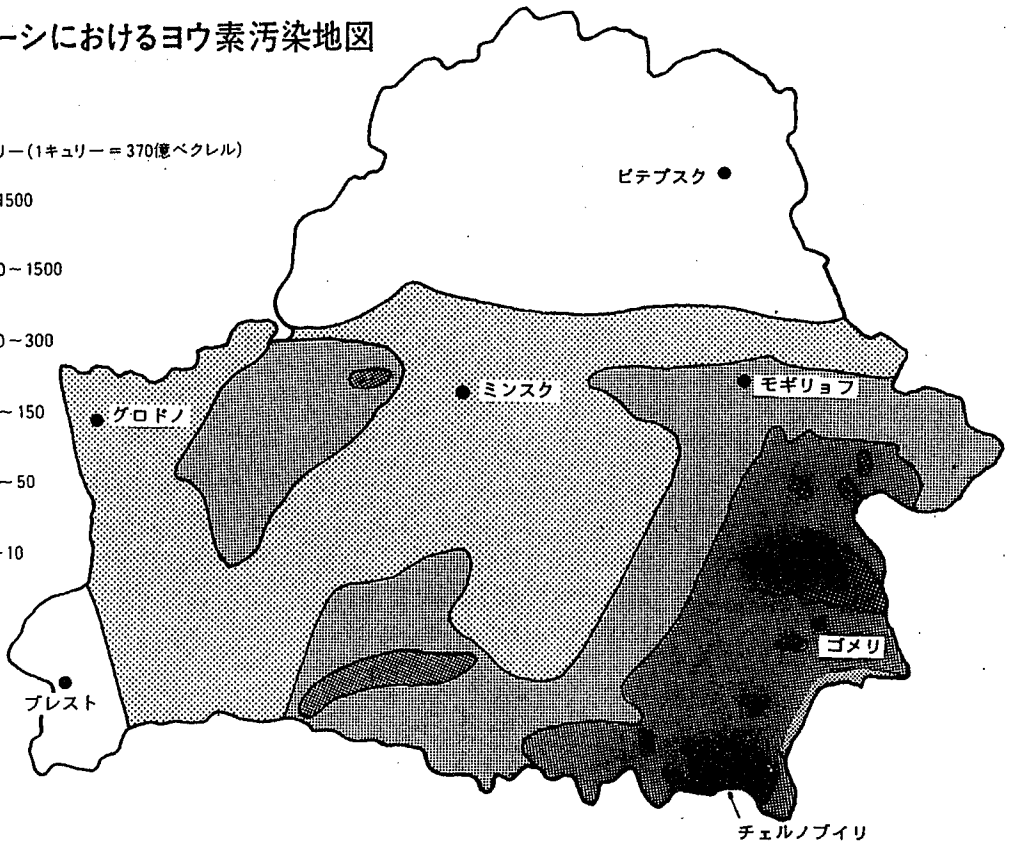
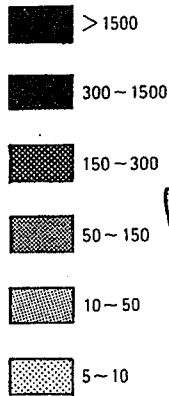
4. 被害者に対する医療および社会的補償にも、深刻な問題点が存在している。我々は各国の政府と議会に被害者への救済および被曝の責任を明確にした補償を行なう法律の採択を呼びかける。
5. 核兵器と原発が現存し、全地球的規模の被害をもたらす核による事故の可能性が存在する限り、人類は深刻な脅威にさらされている。したがって、我々は核兵器の廃絶と原発およびすべての核燃料施設の廃棄をめざして努力しなければならない。これ以上の核の被害者を増やしてはならない。
6. チェルノブイリの放射能による被害の実態の解明とその克服についての措置は未だ不十分である。シンポジウムの参加者は、これらの諸問題に関して、組織や機関にかかわらず、すべての核被害者、専門家、市民レベルの研究と交流を呼びかける。
7. 91年のIAEA（国際原子力機関）報告は、いままであらわれた放射線の生態的、医学的、社会的被害を反映していない。IAEA報告が出した許容被曝線量の値と楽観的予測に我々は同意できない。
8. 核による事故を十分な知識をもって深く専門的に扱うことのできる科学者と専門家の教育が極めて重要なことである。蓄積した経験を総括し審議するような国際会議とシンポジウムをもっと頻繁に開くことが必要である。そして、核による被害を研究する学者、とくに若い人の学術的交流の交換が必要である。

チェルノブイリ情報 (5) ヨウ素の汚染地図

藤田 祐幸

ベラルーシにおけるヨウ素汚染地図

単位：キュリー(1キュリー=370億ベクレル)



この6月にミンスクで開催されたチェルノブイリ問題に関するシンポジウムの席上、事故直後のヨウ素による汚染地図が作られていることが明らかにされた。セシウムによる汚染地図を作製したミンスクの水文気象委員会のマトビエンコ氏のオフィスで、私たちはその地図を見ることができた。この地図は未完成で、さらに詳細な調査を行い完成させる予定であるとのこと。私たちは未公開のこの地図の写真を撮り、帰国後、原子力資料情報室の努力により復元されたのがこの地図である。

かなり広い範囲で150 キュリー/km²以上に達しており、至近距離では1500キュリー/km²にも達している。これは、事故直後の空間線量が、恐らく数十から数百ミリレントゲンに達していたことを示しており、いくつかの証言と一致する。汚染地域の子供たちに甲状腺の異常が目立つのは、事故直後の高濃度のヨウ素に襲われたことが原因であることは明らかだ。IAEAはこの事実を無視しようとしている。ベラルーシの科学者たちは、この地図を完全なものにするために、誠意溢れる調査研究を続けている。一日も早くこの地図が完成し、公表されることを期待したい。

放射能測定結果

1992年7月 ~ 1992年9月

	測定年月	品名	生産地	セシウム合計 (Bq/kg)
乳製品	92.8	チーズ(2検体)	日本	検出せず(いずれも)
小麦粉	92.8、9	小麦粉(2検体)	カナダ	検出せず(いずれも)
魚肉類	92.9 9	魚練製品 いわし	日本 //	検出せず 検出せず
茶飲料	92.7 8 8 8、9	番茶 紅茶(2検体) 中国茶 コーヒー、はこ茶	日本 不明 中国 不明	検出せず 検出せず(いずれも) 検出せず 検出せず(いずれも)
その他	92.8 8~9	乾しいたけ 鶏卵、醤油、わかめ	日本 //	32 検出せず(いずれも)
飼料	92.7 7、9 7	飼料(牛用)5検体 配合飼料(2検体) 飼料用脱脂粉乳	日本 // //	検出せず(いずれも) 検出せず(いずれも) 18

『寄り合い』のお知らせ

測定室では、発足5周年を記念して、測定活動の現状や悩みを語り合い、今後の運動の進めめ方などを模索する話し合いを開きます。ぜひ、ご参加下さい。

日時：11月1日(日)午後2時~6時

場所：文京区民センター4階D号室

(都営地下鉄「春日」駅下車すぐ)

TEL 03-3238-9035

参加費：無料

【たより購読と放射能測定申し込み】

①表記の日吉の事務局

②放射能測定器を設置してある

東京都千代田区西神田2-7-14

西神田ビル4F たんぼぼ舎内

放射能汚染食品測定室

TEL 03-5275-2480

FAX 03-3238-0797

いずれも連絡可能です。